

## 連語文と日本語

まつもと ひろたけ

### 1 はじめに ー連語アメガフルー

連語や連語論という用語は、国文法や日本語学の世界でそれほどききなれたものとはいえない。しかし、言語学研究会編 1983『日本語文法・連語論(資料編)』のような記述の実践や奥田靖雄 1976「言語の単位としての連語」などの理論的な考察があって、日本語研究に貢献している。

連語研究を实践、理論の面ですすめてきたのがうえにあげた奥田靖雄である。小論は連語のあつかいを中心に奥田のかんがえをよみときながら、そのなかから連語文という概念がとりだせることをしめそうとするものである。

連語と文とのかかわりということが問題としてみえてきたのは、小論の筆者が方言の、具体的には奄美語の文法記述に苦戦するなかで、松本 1982「琉球方言の主格表現の問題点」をかいたころである。その結果、クリモフの内容類型学の活格タイプにも接することになったし、またそれをとおして、三上章の能動詞―所動詞の区分に、ふたたびしたしむようになった。そんなわけで、小論にも奥田のほかにも、三上、クリモフがしばしばでてくる。連語文のことをいいますと、奥田と三上、クリモフがひとつづきになってくるからである。

現代日本語の文章語(標準語)の名詞が格は、その対象をしめすを格と対立して、中心的な用法でうごきのシテ(主語)をしめしている。そのため、文から区別される単語のくみあわせ(連語)をあつかう連語論ではが格名詞と動詞とのくみあわせは、原則として研究対象とされてこなかった。動詞をカザラレとする連語記述の論文をまとめた、言語学研究会編 1983の「編集にあたって」にしめされる連語の一覧リストをみても、が格(およびはだか格)はかざりとしてとりあげられていない。はだか格もその用法に、が格とおなじく、主語になるものがあることから、リストにあげられなかった面がある。

連語としての単語のくみあわせをみると、かざり名詞の格のなかでが格ははぶかれていることをみたが、これに関して奥田 1963『『文法教育の革新』について』に、具体例をならべあげるかたちで、つぎの一節がある。

…「うつくしい花」、「つくえの足」、「東北への旅」、「パンをたべる」、

「雨がふる」というような連語には修飾・被修飾の関係はあるが、まだ文になっていない…

奥田 1984 299 ペ

連語という用語をおぼえたばかりで、内容の理解も不十分だった小論の筆者は、ふつう連語ではないとされるアメガフルのような格の名詞と動詞のくみあわせが連語としてあがっているのが気になって、松本 1970 『連語』概念の発達」の注に紹介しておいた。まだ、あつかいきれないことを、こころおぼえとしてかきとめたような感じである。名詞や動詞のカテゴリカル意味という用語はつかわれていなかったが、「を格の名詞と動詞のくみあわせ」は発表がはじまっていて、それを本当によみこんでいけば、アメガフルに関しても、アメが現象名詞であること、さらに、カテゴリカルな意味などとも関連づけられたはずである。しかし、当時はが格一般のこととしか理解していなかったため、アメガフルが特にあげられているとはかんがえていなかった。

その後の松本 1982 「琉球方言の主格表現の問題点—岩倉市郎『喜界島方言集』の価値—」は、標準文章語ならが格がでてくる喜界島方言の名詞基本形と自動詞とのくみあわせを、連語論のてつづきで検討したものである。形式上、主述関係にかかわるまとまりを、文としてでなく、連語論的にあつかうことにためらいを感じていた。しかし、連語的なあつかいでそれなりにみえてきたことがあったのも事実である。

## 2 アメガフルと本ヲヨム

奥田 1963 のアメガフルの連語としての提出が奥田自身の研究のながれのなかからでてきたものであることを、未公刊の奥田 1955 「日本語の主語について (2)」コピーを 2019 年くれにゆもとしょうなん氏からめぐまれてしることができた。奥田 1955 の公刊はいずれ言語学研究会の手によっておこなわれることとおもうので、以下では小論のとりあつかう範囲の内容に限定して紹介する。奥田 1963 のアメガフルは奥田 1955 にも範例のひとつのようなかたちであがっている。<sup>1</sup>

奥田 1955 は、アメガフルを

…「…ガ」のかたちがふつうの主語をいいあらわすばあいを分類してみます。というなかでさしだすが、ガ格が普通の主語をいいあらわすばあいが、むつつに区分されている。それに共通の特徴はむつつをあげたあとのまとめに、

さて、以上「…ガ」のかたちがふつうの主語になるばあいをむつつの項目にわけ

<sup>1</sup> 奥田 1955 ガリ版ずりの字句不鮮明の箇所は、そこにくわえられているかきこみを参照して当面のよみをさだめておいた。

てみたのですが、ここからひきだされる共通の特徴は、これらの単語のくみあわせのような性格をもっているということです。

と、しめされているが、そこにみえる単語のくみあわせのような性格とは、主語と述語とのくみあわせから区別した単語のくみあわせということで、あとで、連語ともよばれるものである。奥田 1955 にみえるアメガフルは、ふつうの主語のばあいのむつつの分類のでだし「(―)主語とのむすびつきのかたい自動詞) のところに、収集された実例としてではないが、地の文章のなかにこの項の説明に必要な例示、つまり範例としてでている。「むすびつきのかたい」ということがそこでは

つまり、主語は動詞の意味をあきらかにする補語(目的語)的な役めをはたしているのです。「雨がふる」「家がもえる」というような主語と述語とのくみあわせは、「本をよむ」「字をかく」といった単語のくみあわせに、性格的にちかいわけです。

のようにのべられている。「性格的にちかい」といういいまわしは、表現面にとどまらない、内容面の共通性をつよくおしだしているのとれるが、そこからつぎにつづく。

しかし陳述があるという点で本質的にちがっている。

「性格的にちかい」けれども「本質的にちがっている」のだから、奥田 1955 はアメガフルはやはり文だといっている。

しかし、性格的にちかいというのは、外見はちがうがということをふまえているようにみえる。だとすれば、アメガ(フル)、本ヲ(ヨム)と名詞語形の表現面はが格、を格とちがっているのに、くみあわせの内容面では性格的にちかいと指摘している。奥田 1955 でアメガフルを文と認定するのは、このが格が「ふつうの主語」として、ほかの主語的なが格に連続していて、その種のが格をもつ単語のくみあわせは文であるということからだとかんがえられる。そうなると、本質的にちがっているといっても、それはが格、を格という表現面のちがいでしかない。「陳述がある」というのも、アメガフルの名詞部分がが格であることのおもえる。奥田 1963 は奥田 1955 をひっくりかえして、アメガフルを連語の例としてあげる。性格的にちかいというのが単語のくみあわせの内容面、つまり単語のむすびつきのレベルのことだからこそ、あのような逆転も生じたといえる。

### 3 ふつうの主語

奥田 1955 はアメガフルほかの例を、が格がふつうの主語をいいあらわすばあいとしてあげている。普通の主語をいいあらわすが格なら、用法の記述がここからはじまって

もよさそうだが、そうなってはいない。それがが格の用法の出発点ではないからだろう。もともと連体格だったが格は、主語表現をめざすおなじ連体格のの格、とりたての～ハ、さらにふるい主語表示形のハダカ格（基本格あるいは基本形）などとのせりあいからぬけだして、ふつうの主語をいいあらわすようになったものである。その点で、ふつうの主語の位置におさまるが格は後発的、二次的である。奥田 1955 の記述の順序は、そのことを反映している。

奥田 1955 につづいて、奥田 1956「日本語における主語」（奥田 1985『ことばの研究・序説』に）があるが、いま問題にしている、が格がふつうの主語をあらわすばあいの下位区分（一）～（六）の辺を、特にとりあげてはいない。奥田 1956 をのせる奥田 1984 の奥田自身によるあとがきにも、奥田 1956 に関して、

もう 30 年ちかい年月がたっているが、そのあいだにぼくは「は」と「が」とのつかいわけの事実的な資料をしらべたわけでもないので、ここからすこしも進歩してはいない。 『ことばの研究・序説』 318～319 ペ

とのべている。

事実的な資料にあたっていないとはいえ、奥田 1985 の奥田 1956 に関してのつぎのようなまとめは、奥田 1955 のふつうの主語をめぐる（一）～（六）をとりあげるとき参考になる。動詞述語文の、

…述語がいちいちの物の現象（うごきと状態）を表現しているときにのみ、主語は「が」のかたちをとる。 『ことばの研究・序説』 319 ペ

形容詞述語文についてはなしてが観察者として場面に登場しているときには、形容詞述語文でも、主語は「が」のかたちをとっている。

『ことばの研究・序説』 319 ペ

など。

このことに関連して、さきの松本 1982 で喜界島阿伝ユミタで、アメガフルのような現象文、さらに存在文などの主語がが格でなく基本形（基本格、ハダカ格）であらわれることを岩倉市郎 1942『喜界島方言集』の文例にてらして指摘した。喜界島方言でも、大朝戸ユミタなどは、動詞述語文の主語はが格（鼻濁音）への統一がすすんでいる。この傾向は岩倉 1942 にあらわれた以後の阿伝ユミタにもみられるが、なお基本形の主語のでてくる箇所はきえてしまっていない。

名詞基本形の主語がたもたれることは、動詞述語文との関連で動詞の語形に日本語一般の連体形を出発点とする後発の終止形でなく、以前の終止形のなかで、ふるい部分である旧連体形をもとにしているといえる、～ヲリ形（ヌミュイなど）をのこしているこ

となどがきいているとかんがえられる。そして、現象文、存在文にのこる名詞基本形の主語の内容面は、が格へとうつつてもたもたれて、奥田 1955 のいうふつうの主語としてあらわれている。

このように喜界島方言阿伝ユミタなどでは、奥田 1955 のいうふつうの主語にあたる部分が基本形であらわれるが、阿伝ユミタの名詞基本形の中心的な用法はふつうの対格である。ふつうの対格は強調的な対格と区別される。

奥田 1955 が、アメガフル、イエガモエルのようなふつうの主語をいいあらわすが格に、本ヲヨム、字ヲカクのようなくみあわせに「性格的にちかい」ことを指摘するのは、が格、を格という表現面のちがいがあるにもかかわらず、が格でしめされる「主語は動詞の意味をあきらかにする補語（目的語）的な役めをはたしているのです。」という内容面での連続性をみすえたからである。喜界島阿伝ユミタでは、この内容面での連続性がおなじひとつの基本形でしめされるという表現面にもうつしだされている。名詞基本形は、格のメンバーにくわわれれば、阿伝ユミタでは主格＝対格的にはたらくが、名詞の語形としては、語幹のままのかたちとして、名詞の文法的なカテゴリーの分化以前の出发点である。連語と文との連続性の保持されるばあいの名詞がわのたち位置として、ふさわしいものといえるようだ。

#### 4 古層ののこりかた

それが文が連語かの問題はおいても、単語のくみあわせアメガフルと本ヲヨムとは、アメガと本ヲという名詞部分のかたちづけによって、表現面でちがっている。しかし、アメガフルと本ヲヨムとは、奥田 1955 のいう性格的にちかい面、つまり内容面で共通するものがある。一方、喜界島方言では、うへの点に関して、内容面の共通性が、アメフル、本ヨムにあたる名詞基本形の使用によって、表現面でもたもたれている。ふたつのいきかたをくらべると、内容面の共通性が表現面にもでている喜界島方言のほうに、ヨリ古色がのこっている。所動主格（非活格）と対格にあたるかたちがともに名詞語幹にあたる基本形ででていることは、クリモフによって主格—対格タイプにさきだつとされる活格構造に妥当する。それに対して名詞部分をが格、を格にふりわけ文章日本語は、すくなくとも表現面では、主格と対格、あるいは主語と直接補語を区別する主格 - 対格構造へとむかっているからである。とはいえ、文章日本語のアメガフル、本ヲヨムという名詞のが格、を格による区別も、なお内容面へといきこみきってはいない。そこが奥田 1955 のふたつが性格的にちかいという指摘になっているといえる。三上章が能動主格と区別した所動主格、形容主格のことをいい、鈴木康之 1983 が、汚水

ガナガレル、電車ガウゴクのようにくみあわせを連語のがわにいれ、宮島 2005「連語論の位置づけ」が連語論にくわえてもいい、が格名詞として主格補語的な格をあげるのもおなじ線上にある。すると、問題になるのが、文章日本語にみられる、表現面ではが格、を格を区別しているにもかかわらず、内容面ではが格が、を格と性格的にちかいとされる用法をひきずっていることである。ここでは、形態論的な格形式による区別が先行して、統語論的な面ではまだ活格タイプの性格からぬけきれていない。これは、内容面で統語論的な innovation がすすんでも、表現面では形態論的な古層がのこるといふ一般的なありかたとはちがっている。奥田 1955 は性格的にちかいといういいかたで、その事実を指摘するものとして重要である。

言語にあらわれる innovation が内容面から表現面へとすすむことは、クリモフがたえず指摘している。おなじことはサピア『言語』にもでている。奥田 1955 の指摘は内容面の圧力がつよいと、それが表現面の innovation をよわめる方向へとはたらきかけるとこともあるという指摘になるだろう。

## 5 『日本語文法・連語論（資料編）』から

ある単語のくみあわせが連語か文かという問題提起は、その後もつづいている。言語学研究会 1983 巻頭の鈴木重幸・鈴木康之 1983「編集にあたって」には以下のような箇所がある。

…日本語のばあいは、つぎのような単語のくみあわせがあつて、それが陳述的なむすびつきを実現している文であるか、従属的なむすびつきを実現している連語であるか、判断にくるしむことがおこってくる。

一郎は 髪が しろい。 髪が (の) しろい 一郎は…。

一郎は 足が みじかい。 足が (の) みじかい 一郎は…。

花子は 色が しろい。 色が (の) しろい 花子は…

花子は 気性が はげしい。 気性が (の) はげしい 花子は…。

わたしたちは、ここで、この問題についてなにがしかの結論をひきだそうとはおもわない。そうしなくても、さしあたって日本語の連語の研究は、さしつかえなく進行するからである。連語は文のなかで生産される。いずれにしても、文と連語とはぎりぎりのところで接触してしまつて、それらのあいだに絶対的な境界をひくこのとできないことをかんじるのみである。この種の問題の解決は、文の構造の研究がある程度の高さまで進行していることが前提として必要

である。

(『資料編』8ペ)

『資料編』の「編集にあたって」に関して宮島 2005 に

…巻頭には鈴木重幸・鈴木康之両氏の名義の「編集にあたって」という文章があるが、これも奥田氏のつよい指示にしたがってかかれたものである。

『解釈と鑑賞』2005.

とある。「つよい指示」はいろいろなかたちで文章のすみずみまでおよぶから（これは小論の筆者の実感である）、「編集にあたって」にかかれていることを奥田の見解として紹介する。そこで連語と文との対立と統一の問題を奥田が気にしていたことは、連語の具体的な記述から理論的なほりさげまでおこなってきた奥田として、当然の問題意識だっただろう。

そして、奥田 1955 がアメガフルを留保つきながら連語でなく文、奥田 1963 が連語としているのに対して、1983 年の「編集にあたって」はさきにみたように、「文と連語とはぎりぎりのところで接触してしまって、それらのあいだに絶対的な境界をひくことのできないこと」を強調している。文と連語のあいだでの奥田の見解が最後にもっとも慎重なものいいになるところは、奥田の指示というよりは奥田の見解そのものの転変をしめしている。

例示がアメガフルでなくが格名詞と形容詞とのくみあわせになっているが、形容詞とのくみあわせも奥田 1955 の「(二) あるなしをしめす動詞と形容詞」や「(六) 個人の心理や能力やなりふりや肉体の部分などの状態を規定するばあい」、「(六) よいわるい・おおいすくないの判断の対象」にあがっていて、奥田 1955 からの論旨を展開するのに不適切とはいえない。

また、そこにしめされる「～は…が形容詞」のような二重主格文の述語に関して、奥田本人ではないが、三上章 1965 「「は」と「が」の研究法」が

この種の述語には形容詞が多く、動詞が少ない。動詞のうちでは所動的（形容詞寄り）なのが多く、能動的なのが少ない。 『三上章論文集』324 ペ

とのべている。二重主格文の述語に形容詞とともに所動詞があらわれることを指摘しているが、三上の所動詞と奥田のいうふつうの主語をとる自動詞とのかかわりについては、別にふれる。

## 6 問題のおもさ

アメガフルのような単語のくみあわせに関して、奥田 1955、63 さらに 1983「編集にあたって」で見解が文、連語そして保留と三転するのは、奥田の主観的なまよいとかゆれというものではない。ゆれがあるのはたしかだが、ゆれの土台に対象そのものの二面性がある。奥田 1955 で文とみたのはアメガフルに文としての側面があって、奥田がそれをみとめていたためである。奥田 1963 で連語の例としてあげたのは、奥田 1955 のいうアメガフルとホンヲヨムとの「性格的にちかい」点をおもくみたからである。どちらも客観的な根拠にもとづいているが、その評価のしかたでみかたがわかれている。

1983「編集にあたって」は、アメガフルなどの単語のくみあわせが連語か文かという問題への解答をさしだしていない。その点では奥田 1955、奥田 1963 にくらべて後退しているようだが、これを後退ということはできない。本当の後退があるとしたら、それは連語と文とのかかわりあいの問題を、たいした問題ではないとしてとりあげたときである。「編集にあたって」はアメガフルが連語か文かに対する解答は保留したが、問題自体のおもさを意識していることは、まえの引用の最後の部分に、

この種の問題の解決は、文の構造の研究がある程度の高さにまで進行していることが前提として必要である。 『資料編』8 ペ

とのべてあることにあらわれている。連語研究を徹底的におしすすめたといえる奥田からみれば、文の研究がまだそのレベルに達していないという実感があつたのだろう。

さきあげた松本 1982 での喜界島方言の名詞基本形の主語をもつ文に関する連語論的なあつかいも、現象や存在をあらわす文には連語的な側面があって、それがそういうあつかいをうけいれたということだったと、いまはかんがえている。奥田 1963 が連語の例としてアメガフルをさしだして、「修飾、被修飾の関係はあるが、まだ文にはなっていない。」といっているところは、「ふつうの主語」をとる自動詞や形容詞とのくみあわせの連語的な側面を特に強調したいいかたになっている。

## 7 ふつうの主語をうける述語＝用言

奥田 1955 が、アメガフルに代表されるタイプの文を問題にするなかで、主語として「ふつうの主語」をとりだしているのは、みてきたとおりである。ふつうの主語をとる文がいくつかに分類されてあがっているが、その種の主語をうける述語＝用言としては、(一) 主語とのむすびつきのかたい自動詞、(二) あるなしをしめす動詞と形容詞、(三) できる立場の動詞、のように述語のグループを指定した項目のほかにも、(五) 個人の



心理や能力やなりふりや肉体の部分を、規定するばあい、のところのように、説明のなかに、「いままであげた例では、状態をしめす述語は形容詞ですが…」と、述語の種類についてのべていることもある。

しかし、「日本語の主語について」という題目の論文のせいもあってか、主語をうける述語に関しては、ふみこみのたりないところがある。ことに、ふつうの主語をうける述語のでだしの「(一) 主語とむすびつきのかたい自動詞」のところは、例文もあげられ、この項目の代表例としてであろう、アメガフル、イエガモエルをあげてはいるが、項全体に関しては、

主語の指定を要求する動詞を自動詞のなかからよりぬく仕事をしなければなりません。

とのべるにとどまっている。

が格がふつうの主語をいいあらわすばあいを、主語とのむすびつきのかたい自動詞からはじめるのは、それにふつうの主語をうける述語の代表、中心的な位置づけをあたえていることであろう。あがっているアメガフルが奥田 1963 にもまたでてくるのは、その代表性をみこんでいることのあらわれである。しかし奥田自身は、この動詞クラス、自動詞グループをよりぬく、とりだす作業をしていない。「主語とのむすびつきのかたい自動詞」がこれからのよりぬき作業でとりだされるものだったとしても、アメガフルでの例示やあげられた実例からみて、ゆくさきにみえてくるのが現象文や存在に代表される自動詞グループであることは、根拠のない憶測ではない。しかし、論文で宣言しているよりぬきは、実際にはおこなわれていない。

動詞項目として当の(現象)自動詞のとりだしは、まず現象(自動詞)文をあつめることから始まる。その種の現象文が奥田 1955 にさしだされているのはたしかだが、そこにでてくる動詞には、ツク、カエル、デル、クルのような移動動詞がみうけられる。移動動詞の意味の中心は現象さししめしではなく、ヒトの意志的な往来発着行為のさししめしにある。しかし、あげられた例文にみるように、移動動詞が現象文につかわれることもある。アメガフル、イエガモエルを中心とする現象文はその周辺にその種の移動動詞からなる、移動文でない現象文をかかえこんでいる。用法としての現象文をになう動詞が現象動詞以外へもひろがりを見せているとしたら、よりぬき作業はそう簡単ではない。奥田 1955 からはそういう方向がみえてくる。奥田 1955 のあるなしをしめす動詞と形容詞のところも、三上の所動詞とかさなるところがあるが、三上が存在動詞イールをそれぞれ能動詞と所動詞へとふりわけているのに対して、奥田 1955 の実例にはイールがあがっているため、三上の所動詞とはまだへだたりがあるようにみえる。一方、

アル、イルは三上 1943「用言の種類」に所動詞 - 能動詞の対立の説明につかわれている。

しかし、奥田 1955 のあるなしをしめす動詞と形容詞のところにでている实例はつぎのイルである。

お清さんが、露月町の方にそれはそれはいい腕の散髪屋がいるっていうのよ。イルの典型的な用法といえる能動詞的なイルとちがって、散髪屋がアルにいいかえてよさそうなイルである。イルの用法のなかから、意識的にその種のをひろいだしているようにもみえる。奥田 1955 が能動詞としてのイルを別あつかいしようとしていることのあらわれだとすれば、ふつうの主語の文は所動詞文とちがづいてくる。

三上章の能動詞—所動詞という区分は、晩年には動詞そのものの区分でなくて、用法のちがいで格さげされていることもあるが、三上 1970『文法小論集』に

その後、この対立のことを深くも考えていないし、名称の未練も少ない。というわりには、あちこちでている。初期の三上 1943 などで、

…自動他動の対立よりももっと大切なのは能動所動の区別である。…ここは「俚になる有情の行為」を表わす能動詞 (active verb) と「俚ならぬ非情の現象」を表す所動詞 (inactive v.) との区別が必要になって来る。

『論文集』29 ぺ<sup>2</sup>

とまで主張しているのをよんでいるせいもある。所動詞には奥田 1955 がよりぬこうとしていた動詞クラスや、ふつうの主語とくみあわせる動詞グループがくわわっていくと筆者にはかながえられる。奥田 1955 は主語の問題をあつかうなかで、ふつうの主語とくむ動詞クラス、用言の種類のことにも目がむいた。三上 1943 ははじめから、用言の種類を問題としてたというちがいはあるが、両者とも本人なりの研究をすすめるなかから、日本語動詞に関しておなじ側面をみずえることになっている。

おなじ三上 1943 には、所動詞に関して、文法的な特徴という点から

所動詞は命令法が不自然に響くし、受身文を作らないし、「…テクル」とも言えない。

『論文集』30 ぺ

とのべられている、つまり能動詞にはでてくる語形が、所動詞ではかけていることの指摘である。

三上 1943 の、所動詞と能動詞とにあらわれる語形のありなしのちがいは、のちに内容類型学をとえ言語の発展段階に活格タイプを位置づけたクリモフ 1983 石田修一訳

<sup>2</sup> 英訳 active-innactive という用語は意識的に transitive-intransitive をなぞってそれをこえようとする三上の意気ごみのようなものさえ感じられる。クリモフの active-stative はふつうであろう。

2016『内容類型学の原理』にもでてくる。不活格構文をになう状態動詞とそれに対立する活格動詞に関して、活用体系にあらわれる対立として、つぎのようにのべられている。

目につくのは活格動詞が完全なパラダイムを有するのに対して、状態動詞のそれが不完全であることである。 石田訳 269 ペ

ついでながら、三上 1970 が「名称の未練も少ない」といっている能動詞 *active verb*、所動詞 *inactive verb* に小論の筆者がこだわるのは、この種の細部にまで顕現する三上とクリモフの接点のせいである。三上章の所説には、動詞のあつかいやなづけをはじめとして、クリモフの活格タイプをさきどりしているところがある。

そこで、奥田 1955 のふつうの主語とセットになる述語は、クリモフ三上の動詞区分をうけいれたうえで、三上の用語をいかして所動詞述語とよんでおきたい。

## 8 独立性のよわい文—連語文その1—

ふつうの主語と所動詞述語からなる所動詞文をかんがえるとき、そのことに直接ふれているのではないが、奥田 1984「文のこと」に独立性のつよい文、よわい文といういかたがでてくる。

独立性のつよい文を典型として研究の出発点におくとすれば、独立性のよわい文には *reduction* の現象がおこって、なんらかの特徴がよわまっている、はぎとられている、とも考えられる。

『ことばの研究・序説 228 ペ』

独立性、典型、特徴などの一般用語でふくみおおくのべてあるため、多様なうけとめができそうだが、小論の展開からだ、第一にまず、クリモフが形態論的なレベルで、所動詞のパラダイムが不完全であるといっていることと、うへの奥田の独立性のつよい文、よわい文という統語レベルでの発言との関連がとりあげられる。

奥田 1984 によれば、独立性のよわい文は、典型としての独立性のつよい文のなんらかの特徴がよわまったり、はぎとられたりしたものである。所動詞の命令法やうけみに関する三上 1943 の指摘はクリモフの不完全なパラダイムというところを、日本語から具体的にとりだしたものだが、問題をパラダイムという形態論的なレベルから文のレベルへとうつして、能動詞文を独立性のつよい文に位置づければ、命令やうけみ表現に関して、その特徴がよわまったり、はぎとられたりしたのが、所動詞文であることにな

る。特徴のよわまりは、所動詞文の命令表現があいてに対するはたらきかけにならないことや、うけみ表現がはためいわくのうけみの意味に特殊化することなどをかんがえればいだろう。命令文うけみ文がなりたないなら、典型としての能動文の特徴がはぎとられていることになる。

所動詞文で所動詞述語と一対になる主語である奥田 1955 のふつうの主語は、を格の直接補語に性格的にちかいとされていた。能動詞文が独立性のつよい文として典型であるなら、そこにあらわれる三上のいう能動主格の主語が、主語の典型であって、所動主格の主語は、所動詞述語のばあいと同様、なんらかの特徴のよわまり、はぎとりをうけているのだろう。その結果、所動主格（主格補語）のが格はを格と性格的にちかいものになり、喜界島方言のような両者がおなじひとつの基本形であらわされるいきかたもでてくることになるといえる。

このようにみてくると所動詞文は、能動詞文とくらべたばあい、独立性のつよい文ではなく、独立性のよわい文のグループにはいるようである。しかしそれは、所動詞文というグループ全体について、しかも能動詞文に対立させたときにいえることであって、ひとつひとつの所動詞文に独立性のよわさがつきまわっているわけではないとかんがえられる。それにもかかわらず、所動詞文の独立性のよわさということは、やはり存在する。小論でとりあげてきたアメガフルをめぐる奥田 1955、1963、さらに例は別だが同一のことをとりあげた 1983 年の発言などにみられる連語か文か、認否保留のゆれは奥田 1984 のいう独立性のよわい文と連語との、あるいは所動詞文と連語とに客観的な事実としての連続性があることのあらわれだろう。

連語か文かという問題が具体的にでてきたアメガフルに代表される文のグループ、つまり所動詞文は、奥田 1955 以来の自問自答の線にそって、別のなづけをあたえんとすれば、連語と文というふたつの領域をつなぐ単位という内容をとって連語文となづけることができる。みてきたかぎりでは、連語文は、所動詞文とかさなっていて、特につけたす必要のない用語である。しかし、連語文とよぶことのできる文は、日本語ではうえの所動詞文にとどまらない。その点で必要な用語になってくることは、つぎにのべる。

## 9 文としての本ヲヨム—もうひとつの連語文—

連語文という用語のさししめす内容を、アメガフルほかの所動詞だけに限定しては、範囲がせばまることになる。奥田 1955 で、アメガフルに性格的にちかいとされる本ヲヨム、パンヲタベルは、アメガフルとちがって主語かどうかの問題になる部分などのない連語だが、コレカラナニヲスル？ときかれてこたえた本ヲヨム、パンヲタベル、は連

語でなくて文である。ということは、ここにも連語文がなりたつことをしめす。こうみると、連語がそのまま文に昇格した連語文は、日本語では一般的といえる。アメガフルに代表される所動詞文の領域にだけ連語文現象があらわれるのではない。

連語のことが直接でてくるわけではないが、単語と文とのかかわりをめぐって、奥田 1980「構文論の再出発」につきのような指摘がある。

たとえば、現象名詞である〈雨〉という単語は、それにテンス・ムードをあたえるだけで、文としての《あめ》に転化するのだが… 『序説』 104 ペ

おなじことが奥田 1981～84「言語の体系性」にもくりかえしのべられていて、奥田 1980 よりくわしく説明されている。

単語ははじめから文をくみたてる部分の要素として存在しているのであって、全体＝体系としての文のそとに単語がアクチュアルに存在しているとすれば、それはもはや単語ではなく、文である。たとえば、「あめ」とか「ゆき」、「かじ」とか「けんか」とかというような、いわゆる《出来事名詞》は、テンス・ムードをあたえるだけで文へ移行するが、このときこれらの単語は名詞性をはぎとられて、あたらしく文としての特徴づけがあたえられる。 『序説』 201 ペ

奥田 1980 からの引用部分をアメガフル、本ヲヨムなどの、小論で連語としてあつかっている単語のくみあわせに適用して、アメガフル、本ヲヨムという連語は、それにテンス・ムードをあたえるだけで文としてのアメガフル、本ヲヨムへと移行するとあてはめても不自然とはおもわれない。

さらに、宮島 2005 ののべる、

「単語が文のそとに存在しているのとおなじ意味で、連語も文のそとに存在している。」はいえないのではないか。…実体としての連語「青空をみあげる」は「青空をみあげている」「青空もみあげた」「青空はみあげなかった」などから抽象して、分析の結果つくりあげたものである。

という面も、連語文をとりだしやすい、連語と文との統一面を指摘したものだろう。

奥田 1985 のつぎの発言は、連語を文を言語の単位として区別しながら連語における単語のむすびつきという内容面の研究が、文の意味構造の研究と実質的、実践的にかさなってくることをしめしている。

そして、連語は文の文法的な構造（意味構造）をもっとも単純なすがたで提出していて、構文論的な研究のもっともちかづきやすい、初期の段階における対象になるだろう。 『序説』 31 ペ

連語文のような単位が存在することも、連語と文との内容面でのかさなりが、表現面へ

も反映していることのあらわれであろう。

連語の本ヲヨムからそのまま昇格した連語文、本ヲヨムは、表現面ではもとの連語のままなので、シテをしめす（能動）主語がでてこない。これは奥田 1984 の独立性のつよい文のひとつの特徴がはぎとられていることをしめす。奥田 1984 にてらせば、文としての本ヲヨムは独立性のよわい文である。表現面にあらわれているもとの連語とのかかわりの緊密さから、本ヲヨムの類の文に連語文というなづけをあたえることは不適切でない。

連語文がなりたつなら、文のくみたてにかならず主語がでてくるという必要はない。奥田 1963 などを見ると、また、文法教科書づくりの実践からみると、奥田は三上のような主語否定・廃止論を否定しているととれるが、それほど単純にわりきってはいない。奥田 1958 「言語と思想」は

また、文が主語と述語からなりたつという規定は、きわめて限定されたわくのなかでのみ有効である。英語のような言葉では、その文法制度の特殊性から、主語の存在は文を特徴づける文法的な形式になっているが、日本語のような言葉では、主語の存在は、かならずしも文を成立させる必要な条件ではない。

言語学編③128 ペ

連語文が日本語に成立することを奥田自身がかたっているといっている。

連語文を主述文からの退行 *reduction* と一方的にきめる必要はないだろう。主述文がさきにあって、それが退化したものにみえなくはないが、連語文がアメガフルのような所動詞文をかかえこんでいるとしたら、単語文から二語文への発展の過程で、いわゆる主述文的な（ため典型的とされている）二語文と同時に、存在していたこともかんがえられる。また、脱ばめん性のすすまない段階の二語文として、連語文が全体として、主述文に先行していたともかんがえられるのではないか。ばめんや文脈（話線）にしばられることのすくない主格 - 対格タイプの言語からの一方的なみかたがでていのように感じられる。連語文が二語文であることは、項をあらためてのべる。

## 10 ふたつの連語文—その統一面—

連語文という単位をたてたうえで、それをアメガフル式の所動詞連語文とそれ以外の本ヲヨム式の連語文とにわけて説明してきたが、両者は無論、密接にかかわりあっている。

アメガフルが奥田 1963 にしめすように連語であるなら、その種の連語は陳述性によってつつみこまれることにささえられて、全体としてそのままで文に昇格する。小論で

かんがえるように、アメガフルの例がひろげられて、所動詞文へとおよぶとすれば所動詞文はまた、連語文とよべるかたちで存在するということができる。

この種の連語文には、が格名詞があらわれるが、それは所動主格としてはたらく。宮島 2005 のいう主格補語的なが格であって、能動主格としてシテ主語をうけもつが格名詞はふくまない。

もうひとつの連語文は本ヲヨムのような連語がそのまま文に昇格したもので、もとの連語のままのかちのため、が格名詞はでてこない。

二種の連語文はが格名詞からなる文の部分をふくむかふくまないかということでは根本的に対立している。が格名詞をふくむ連語文は主述文であって、ふくまない連語文は無主語文であるというふうには。

しかし、この対立はが格名詞部分が文中にあるかないかという、それだけでは表現面にあらわれた対立である。当のが格名詞はを格名詞でしめされる文の部分と、なん度か紹介した奥田 1955 の「性格的にちかい」といういいかたが、この種のが格名詞をを格名詞との内容面でのちかさをしめすものである。この内容面のちかさは、喜界島方言などのように、が格名詞部分とを格名詞部分が、おなじひとつのかたち、名詞基本形であられる言語では、表現面での事実になっている。

さきに紹介したように喜界島方言ではアメガフルと本ヲヨムの名詞部分が文章日本語とちがってそれぞれが格、を格とふりわけられたりしないで、ともに格助辞のつかない基本形ででてくる。ここには所動詞文＝不活格文の「主語」と活格文の「直接補語」とがひとつであるという、活格タイプの言語の特徴が、表現面をとおしてあらわれている。

このことからすれば、日本語のが格成立のいきさつもあって、アメガフル、本ヲヨムとわかれているとはいえ、アメガフル式連語文と本ヲヨム式連語文とは、おなじひとつのもとから生じている。両者は主述文、他方は対格連語として対立するが、その対立がきわだつのは主格＝対格タイプの言語ばあいであって、活格タイプの言語では、所動詞文の主語と能動詞文の対格とは、性格的にちかいにとどまらず、喜界島方言にあらわれるように、表現面でもひとつになるのが常態である。

形容詞文は三上 1943 などでは所動詞文と区別してとりあげられるが、述語としてでてくるばあい、形容詞のふるまいは、能動詞的とはいえ、所動詞がわである。形容詞文にでてくるが格名詞も、三上 1943 での形容主格でなくても、宮島 2005 の主格補語に所動詞文と形容詞文のが格名詞を統一しておけばいい。

所動詞文＝連語文ともうひとつの連語文は、たがいに、一方がなりたてば他方もなり

たつという関係にある。奥田 1955 のアメガフルという文の主述関係の特殊性の指摘は、所動詞文の連語文としての性格をえぐりだし、さらに連語、本ヲヨムが文に昇格したもうひとつの連語文の存在をしめしてくれる。活格制度のもとでは、両者はアメ フル、本 ヨムにあたるおなじひとつの表現をうけていたはずである。

さきに、奥田 1984 に独立性のつよい文と独立性のよわい文との区別がされているのを紹介したが、この観点からみると、連語とのへだたりがおおくないということは、独立性のつよい文のほうの特徴とはいえない。だとすれば、二種の連語文はどちらも、独立性のつよい文、あるいは典型的な文のほうには属さない文といえる。<sup>3</sup>

### 1.1 一語文か二語文か

一語文、二語文という用語は、はやくから奥田の論著にあらわれる。奥田 1953「単語について一文法にはいるために一」や奥田 1956「ことばの組みたて」、奥田 1963, 64「言語学と国語教育」に、また、あとのほうでも奥田 1983「文のこと一文のさまざま(1)」にもでてくるが、しばしば一語文 one-member sentence、二語文 two-member sentence のよびなが併記されている。

アメガフル、本ヲヨムのような連語文があるとすれば、それは二語からなる二語文とかがえてよさそうだが、奥田 1956 のつぎの説明だと、二語文は原則として主語と述語がないといけならしいことが、はじめの部分からよみとれる。しかし、最後の部分からは、主語のない二語文の存在がみとめられている。

二語文は主語と述語とのふたつの部分からなりたっています。…

しかし、二語文のなかに主語と述語があるということを機械的にのみこんではいけません。文というものは、場面と文脈のなかにあるわけですから、すでにはなされるもの、ことがあきらかなばあい、主語はいりません。…したがって、二語文は、どういう条件のなかで、主語があるかないか、文章論はあきらかにしなければならぬのです。これにたいして、一語文は、どういう条件のもとでも、主語がありません。

著作集③118 ペ

奥田 1956 の二語文の説明のように、主語のない二語文をみとめることができるのであれば、本ヲヨム、パンヲタベル、という連語文はそれにあたる。「二語文は、どうい

<sup>3</sup>典型的な文という用語は工藤浩 1989「現代日本語の文の叙法性 序章」に、一語文と二語文の区別にあたるところで、典型的二語文といういいかたででてきている。二語文に関しては、独立性のつよい文にかさなるようだが、典型的な二語文とともに典型的な一語文ともつかうことができそうなので、典型的な文を採用しておく。



条件のなかで、主語があるかないか」という問題提起はさきにみた奥田 1956 にもでてくる。主語のない二語文をみとめる当時の奥田にとって、解決すべき課題だったのだろうが、その後の研究のすすみぐあいをみわたすと、いまでも問題になりうる。連語文という単位があるとみることは、主語のない二語文をやや具体的にしめしたことになる。

二語文という用語はでてこないが、奥田 1980～81「言語の体系性」は、つぎのようにのべる箇所がある。

現実の世界の出来事をえがきだすために、文は体言と用言とのくみあわせであることが必要である。文が体言と体言とのくみあわせであるとすれば、あるいは用言と用言とのくみあわせであるとすれば、一方の側に用言化、体言化の現象がおこってくる。 『序説』 199 ペ

二語文という用語のこととは別に、うへの文の基本的な構造についての説明として、主語－述語がかおをださない、この傾向は奥田 1980～81 のあとにもつづく。

奥田 1985 の二語文の説明は、体言・用言からである。そこでは

二語文 two-member sentence が《物》をあらわす体言と《特徴》をあらわす用言とからなりたつという文の基本的な構造への理解… 『言語学編』③、39 ペ

と、主語・述語の用語がさけられている。そのあとに、

《物》というのは、特徴のもち主であって、体言で表現されている。 同上とあるのも、主語として述語でしめされる特徴のもちぬしをしめすことをのべているわけではなく、用言に対して体言が用言でしめされる特徴のもちぬしであることをいおうとしている。

用言－体言を主語－述語の単なるいいかえのようにとってはいもったいないだろう。奥田 1980～81 や奥田 1985 で二語文の規定のように体言－用言からはいると、主述文だけでなく、連語文も二語文にくわえることができる。それによって、日本語の文の構造に主述文とともに連語文が存在するという日本語の特徴があらためてさしだされる。

ここで、一語文、二語文のことにもどす。ロシア－ソビエト言語学には *odnosostavnoe predlozhenie, dvusostavnoe predlozhenie* という用語があって、ふつうにつかわれている。それぞれを以下〈一語文〉〈二語文〉とっておくが、ワシリエワほか 1995『言語学用語小辞典』の説明をみると、一語文のところは、「主要部分をひとつだけふくむ文」とあり、「いわゆる動詞－一語文」として定人称文、不定人称文、一般人称文、無人称文、不定詞文があがっている。動詞〈一語文〉に対する名詞〈一語文〉のことは、文の主要部分とは主語と述語のことだから、動詞－一語文というのは主語がなく、述語だけからな

る点で主要部分ひとつだけをふくむ一語文になるらしい。以下動詞〈一語文〉(以下〈 〉ははずす) のことをみていく。

これを日本語は機械的にあてはめると、小論はさしだした連語文、特に本ヲヨム、パンヲタベルの類は、主語・述語のうち主語のない、つまり主要部分をひとつしかふくまない動詞一語文である。

しかし、典型的、中心的な一語文と周辺的な一語文という観点から一語文をわけようとするれば、動詞一語文は一語文だったとしても、中心的な一語文にくわわることはできそうもない。一語文の典型は、単独の感動詞からなるような単語＝文としての一語文である。それに比べれば、名詞のでてくる一語文はやや典型性がうすれる。感動詞一語文が外界からの刺激に対する反応としてあらわれるとしても、言語外の対象をさしめず側面がかけている点で、動物言語へとつながるのに対して、名詞単語文は対象さしめし面がでてきていて、その分動物言語からはもちろん、感動詞一語文からもはなれてきている。しかしともに一語文であることはかわらない。

ところが、動詞一語文だと、典型的な一語文にそなわる単語＝文という性格がぼやけるどころか、きえてしまうようにおもえる。単語＝文にあってさえ、名詞一語文は指示対象をもつが、動詞一語文といわれるものは、単語のくみあわせからできているため、ますます人間言語としての特徴をもつようになっていく。この種の動詞一語文を、感動詞一語文と同列にあつかうことには無理がある。典型的な文、完全な文は主語・述語からなるという先入見にとらわれないほうが、動物言語～一語文～二語文の段階性を正当に反映するのではないか。小論でいう連語文が一語文に属するとはかんがえられない。奥田 1956 が二語文のなかに主語のあらわれないものがあるというのは、この点で正当である。

なお、two-member sentence という用語は、アフマノヴァ 1966 『言語学用語辞典』に *dvusostavnoe predlozhenie* にある英訳としてでているが (*odnosostavnoe predlozhenie* のほうは *mononuclear sentence*) 奥田の two-member sentence がそれを参考にしているとしても、うえにのべたように、内容上ちがっている。

ついでながら、方言にはアメガフルのような現象文とアメのような一語文とが、いまでも緊密にかかわりあっているようにみえることがある。喜界島方言でアメガフルにあたるふつうのかたちでなく助辞のつかないかたちを確認しようとしたとき、最終的には、アメガフルにあたるかたちよりふるいアメフルにあたるかたちがききだせたとしても、そこまでいく途中で、アミジャ。(あめだ) とかアミドー (あめだよ)。あるいは二語文からちぢめたアミフィドー (あめふりだよ) のような形式がでてくる。アミフィはアメ

フリとちがって要素間のむすびつきがゆるく、2 単語ではないが、1 単語でもない点で、一語文と二語文の中間的である。アメガフルが連語文をとおりこして一語文とも相関するかのようである。

## 1 2 連語文と主述文

うえにみてきたとおり、連語文のとりだしは、まず、アメガフルのような主語らしくないが格名詞をもつくみたてに注目するところからはじまる。これは奥田 1955, 1963 のあつかいで、文と連語とをゆれているが、そのゆれは、アメガフルに連語的な面と文的な面との両面があるからである。それは、アメガフルのような所動詞文の主語から、～ハであられる名詞文の主語にくらべてはもちろん、能動詞文の主語にくらべても、主語らしさがうすいことからきている。

つぎに、本ヲヨムの連語文は表現面に関してはが格主語がでてこなくても文としてなりたっている。しかし、その種の連語文の内容面にも動作のシテや状態のもちぬしがみとめられないわけではない。ばめんや文脈に文のくみたてをあずける傾向をみせる日本語の文法制度の特徴などがはたらいて、表現面に主語があらわれてこないだけのことである。

こうして日本語では、連語文が主述文とならんで文のくみたてをになうが、連語文と主述文はあれこれのかたちで、たがいにかかわりあっている。単純なところでは、連語文に主語がくわれば主述文にさまがわりする。なんべんもみてきたアメガフルの例も連語文と主述文との接触のかたちをとった、両者のかかわりあいの例である。

連語文にいわばソトから主語がくわることによって主述文になるのに対して、連語文における文の部分のてなおしによって、ウチから主述文へと変更をうけるばあいがある。この辺は、連語文の研究の課題のひとつとして、くわしく記述しないとイケないが、まだ、連語文さえも提出したばかりの段階なので、断片的にあげておく。連語文そのものが内的に主述文へとかわるということだから、連語文のカカリ部分がまず問題になるのは当然だろう。てはじめに、これまでの具体的な連語の記述で、連語としてはとりあげていないものなどをみよう。

奥田「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」ほかでは、かざりのを格名詞部分は、表現面にを格形式をとどめていることが用例としての採集の基礎になっているようである。ムスメヲ芸者ニデモダスという三単語のくみあわせのなかの芸者ニデモは副助辞がついているが、に格がたもたれているから用例としてあがっている。また、一滴モサケヲノマナカッタのかざり名詞はヲ格のままなので用例になっているが、サケハノマナカッ

タなら採用されなかつただろう。連語のかざられ部分サケヲは、サケハとなって、とりたてをうけた結果、陳述的に無色ではなくなっているからである。

サケヲコメカツクルという三単語からなる連語から、かざられ部分サケヲを修正してできたサケハコメカラツクルという文は、連語文がウチからの変更をうけて主述文へと転じている。しかし、くみたての点では三単語が同等の資格で文のくみたてにくわわっているとはいえない。連語としてのくみあわせサケヲツクルとちがって、サケハツクルのサケハを他動詞述語文の補語とみることはできない。サケハを主語＝主題としてみるのが適切だが、だとするとコメカラはあわせ述語コメカラツクルのくみたて部分にはいって、主語サケハをこのあわせ述語コメカラツクルがうけて、(日本の)サケの特性をあらわすレーマとしてはたらいっている。

連語文はアメガフルほかの所動詞文をのぞいて、主述文とちがってが格名詞があらわれることはない。しかしサケハコメカラツクルのように、が格名詞でなくとりたて助辞のハを活用しての、独自の主述文をうみだしている。この種の主述文は連語文を出発点としているという点では、主述文であっても二次的である。

形容詞連語のことになるが、松本 1979「に格の名詞と形容詞とのくみあわせ」に、オモシロイ、ウレシイ、サムイなど感情、感覚の主体をしめすに格名詞は、ふつうダレダレニハのようにハによるとりたてをうけてあらわれるとのべてある。このニハ形は、形容詞が終止述語のばあいとりわけめだつとしたら、文のレベルでの記述の対象にしなくてはならない。それが、ニハ形のニをいかした連語文の一種とも、ハにヨリ注目した斜格(与格)主語をもつ主述文ともあつかうことができそうである。松本 2005「与格主語現象管見」では連語文ということをかんがえていなかったもので、そのことが問題になっていない。

### 1.3 かざられが名詞の連語と連語文

以上、アメガフルにしても本ヲヨムにしても、またかざられ部分に形容詞がくるにしても、奥田 1985 のいいかたをかりれば、体言＋用言のタイプの連語文をみてきた。

これに対して、連体的なかざり＋名詞の連語があれば、そこから昇格した連語文があるはずである。この種の連語文のなかの三上章 1970 に例としてあがっている、

浜辺に泣き伏すお宮であった。

(お宮は、浜辺に泣き伏すのであった)

のようなものだと、カッコ内にしめされる用言文(主述文)とのパラディグマチックな相関によって、二語文的な連語文として認定しやすい。この種の名詞は、名詞文といっ

でも名詞述語文(体言述語文)であって、述語文という点では「いままでの用言述語文と同類である。工藤 1989 で「擬似喚体」「擬似独立語文」とよぶことにしている「先生の意地悪!」の類も二語文を本籍とみでの「擬似」なら三上のあげる例に連続する。

連体的なかざりをともなう名詞がよびかけにつかわれる文になると、two-member sentence としての二語文というよりは、一語文のワク内にとどまっているようにみえる。この種の文は、三上 1970 や工藤 1989 のあげる文とちがって、体言=用言連語文につながる名詞述語文的な側面がとりだせないなど、体言をかざられとする連語は用言をかざられとする連語より、文に昇格したときの二語文らしさにかけるようである。今回は用言性連語から連語文のことをかんがえてきたため、この種の連語と文のかかわりに関しては、以上の指摘にとどめておく。

#### 14 おわりに—日本語の主語—

研究のある時期にかぎられるかは別として奥田 1958 「言語と思想」などにあらわれている、文のくみだてにおいて主語・述語構造を絶対化しないみかたは、アメガフルをめぐる奥田 1963 の見解に連動・呼応する面がある。それはさらに能格制度への言及ともなってあらわれる。

最近刊行されたものだが、西村政則 2021 「奥田靖雄の初期原稿の翻刻：朝鮮大学校における言語学の講義のためのノート」がある。西村 2021 によれば、これが 1958 年度の「言語学概論」講義のためのノートで、その前半部分が上記の奥田 1958 とかさなることが指摘されている。そこで西村 2021 を奥田の研究のなかでは奥田 1958、として紹介しておく。

奥田 1958 にはかかれていないが、つぎの一節がある。ロシア語はローマ字にあらためた。

コーカサス語におけるエルガティブ jergativnaja konstruksija の文では、動作の主体は jergativnyi padezh で表現されている。そして直接対象は主格で表現されている。

「僕には本がよめる」とい(う)文における論理的な主語は、主語という文法的なカテゴリ(一)によって、表現されているわけではない。

『対照言語学研究』28

奥田 1958 にみられる主語観が、言語における主体-客体表現における nominative-accusative タイプの絶対化からではいたりえない展望をしめすことの一端が、公刊論文で言及しなかったが講義ノートにかきとめた、うへの引用にあらわれている。奥田はゴ

リゴリの主語擁護論者として日本語の研究にはいつてはいない。

ロシアソビエトの言語学の言語類型学、なかでも能格言語の研究からクリモフの内容類型学—活格タイプのとりだしが展開していることは知られている。奥田靖雄のアメガフルに代表されるが格名詞のあつかい、さらに能格タイプへの言及をみると、奥田が研究のなかで、クリモフに通じる関心を、日本語によせていたことがみてとれる。奥田も日本語の主語の研究という個別的な作業のなかで、この面の具体的、実証的なほりさげにたちもどりたかったのではないか。そのなかで奥田は日本語に関する三上章の所論との接点をあらためて確認するという事になったであろう。三上が日本語という個別言語からほりおこした面をふくめて体系づけているといえるクリモフの内容類型学もすぐちかくにある。小論は連語文という概念が奥田靖雄のかんがえからでてくることをとおして、奥田から三上、さらにクリモフの内容類型学～活格タイプ言語とのかかわりをみいだそうとした。

奥田 1963 がアメガフルを連語の例としてあげているのは、が格の主語性をひきさげている点で、三上の所動詞文を奥田のたちばから肯定的にとらえようとしているのではないか。奥田 1963 の三上『文法教育の革新』に対する書評は、当時よんだ実感からすると、こてんぱんに三上をやっつけたとしかうけとめていなかったが、そして三上の反論も、なかみのとぼしいものだったようにおもうが、もっと生産的な論じあいができなかったものか。奥田 1955 とちがって奥田 1963 でアメガフルを連語メンバーにいたしたのは、ひょっとして三上へのメッセージだったのではないかとさえおもう。

## 主要参考文献

- 奥田靖雄 1955 「日本語の主語について (2)」民科言語部会報告 未公刊  
 — 1985 『ことばの研究・序説』むぎ書房 (『序説』と略称) — 1963, 1980, 1981-83, 1984 あとがき所収  
 — 2015 『奥田靖雄著作集 2 言語学編 1』 (『言語学編 (1)』) 1988, 1996 ほか  
 — 2015 『奥田靖雄著作集 4 言語学編 (3)』むぎ書房 (『言語学編③』)  
 — 奥田 1953, 1954.1956.1958.1963～64
- 工藤 浩 1989 「現代日本語の文の叙法性 序章」工藤浩 2016 『副詞と文』  
 ひつじ書房
- クリモフ、ゲ・ア 1977 石田修一訳 1999 「新しい言語類型学 活格構造言語とはなにか」三省堂
- 言語学研究会『日本語文法 j・連語論 (資料編)』むぎ書房—鈴木重幸・鈴木康之「編集にあたって」
- 鈴木康之 1983 「連語とはなにか」 (『教育国語』73 むぎ書房)

- 松本泰丈 2005 「与格主語現象管見」(『類型学研究』創刊号)  
— 2006 『連語論と統語論』至文堂—松本 1970、1982 ほか  
三上章 1970 『文法小論集』くろしお出版  
— 1975 『三上章論文集』くろしお出版 — 三上 1943 ほか  
宮島達夫 2005 「連語論の位置づけ」(『国文学解釈と鑑賞』890 至文堂)